

## 目次

### 第16回大会報告

自由研究発表・懇親会・ロングインタビュー

総会報告

大会を終えて…………… 浅井 幸子

大会発表・参加記…………… 轟 晶晶・中塚 良子・内田 将平・藤谷 未央

### 寄稿

「発達に目的はない」という思想の両義性 …………… 宮澤 康人

### 新入会員 / 寄贈図書

機関誌編集委員会・事務局からのお知らせ

## 第16回大会報告

2020年12月12日、第16回大会は、山梨大学にて開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大への対応としてオンライン開催になりました。実施された自由研究発表・総会・ロングインタビュー（シンポジウム）等、大会の詳細は以下の通りです。

### 自由研究発表 9:15 ~ 12:00

司会： 太田 素子（和光大学）  
塩崎 美穂（東洋英和女学院大学）

1. ユリア・シャーロット・ミンガーの生涯とシュタイナー学校を支えたミンガー出版社

有川 優子（関西学院大学大学院）

2. 中国における初期キリスト教幼稚園教員養成  
-求められた教員資質能力とカリキュラムに着目して-

轟 晶晶（早稲田大学大学院）

3. 昭和戦前・戦時下におけるキリスト教保姆養成の特質

-東洋英和女学校幼稚園師範科を中心に-

佐藤 浩代（東洋英和女学院大学）

4. 保育問題研究会における1954年～1969年の乳児保育実践研究

中塚 良子（東北沢ききょう保育園）

懇親会 14:00 ~ 15:00

ロングインタビュー 15:00 ~ 18:00

### テーマ

「創造的・探究的で民主主義的な保育を求める保育関係者のローカル／グローバルなネットワーク形成」

企画・聞き手：秋山麻実（山梨大学 教育学部）

話し手：Robin Duckett

（イギリス Sightlines Initiative 代表）

逐時通訳あり

# 総 会 報 告

2020年12月12日 13:00~14:00 開催

オンライン開催につき、総会資料はダウンロード可能な形で提示され、議案の承認は、端末画面の反応ボタンで行った。総会議長には、湯川理事が選出された。

## 報告事項

### 1. 第15回大会年度(2019.10.1~2020.9.30) 会務報告

◇福元事務局長より、以下の報告があった。

- (1) 会員数：2020年11月末現在169名
- (2) 第15回大会：2019年12月7日、白梅学園大学にて開催。大会参加者74名。

### 2. 編集委員会報告

◇湯川編集委員長より以下の報告があった。

『幼児教育史研究』第15号は、2020年11月発行(編集委員長 湯川理事(論文担当)、編集副委員長 浅井理事(書評担当))。投稿論文4本、うち、論文2本を掲載。その他第15回大会シンポジウムの記録、書評3本、図書紹介3本を掲載した。

### 3. 会報の発行について

◇一見理事より、会報の発行について、2020年2月20日第29号、6月30日第30号を発行、その後Web公開版をアップの旨、報告があった。

### 4. 15周年記念事業について

◇太田会長より、15周年記念事業について告知された。6月の会報第29号に15周年記念事業の理念、趣旨を掲載した。学会予算として、上下巻で100万円が組まれており、会員には割引で購入いただける予定である。

### 5. その他

特になし

## 審議事項

### 1. 第6期役員を選出について

◇福元事務局長より、第6期役員を選出について説明された。役員選挙規程第4条により、役員選挙を実施し、以下の通り、理事10名、監査2名を選出したことが報告され、承認された(以下敬称略)。理事：湯川嘉津美(会長)、勝山吉章(副会長)、浅井幸子(事務局長)、福元真由美(会計)、一見真理子(機関誌編集委員会委員長)、高田文子(同副委員長)、塩崎美穂(会報)、浅野俊和(J-stage)、秋山麻実、オムリ慶子。監査：別府愛、松島のり子。

### 2. 第15回大会年度(2019.10.1~2020.9.30) 決算

◇小玉理事(会計担当)より、「第15回大会年度幼児教育史学会収支報告」(表1:略)に基づき報告がなされ、承認された。

### 3. 第16回大会年度(2020.10.1~2021.9.30) 事業計画

◇福元事務局長より以下の(1)~(5)につき説明があり、承認された。

- (1) 『幼児教育史研究』第16号の編集
  - ・申し合わせに従い、正副編集委員長は1年交替とする。正委員長は翌年副委員長として残る。第16号は、編集委員長(一見理事)、副編集委員長(高田理事)。
  - ・投稿募集その他は、関連規程に従う。大会記録、書評、図書紹介は正副編集委員長に一任する。
- (2) J-STAGE 上での公開について
  - ・14号まで公開済み。15号公開は年明けの予定。
- (3) 会報の発行
  - ・2~3月第31号(第16回大会報告)、6~7月第32号(第17回大会案内)の発行を予定している。会員研究情報の充実に努める。
- (4) 15周年記念事業について
  - ・来年(2021年)、上下巻公刊の予定。
- (5) 第17回大会の予定
  - ・会場：上智大学(東京、湯川嘉津美実行委員長)
  - ・日程：2021年12月上旬(第1or第2土曜日)を予定(詳細は次号会報、学会HPで周知)。

### 4. 第16回大会年度(2020.10.1~2021.9.30) 予算案

◇小玉理事(会計担当)より、表2「第16回大会年度幼児教育史学会予算案」(略)が以下のとおり説明され、承認された。

- ・15周年記念事業費は、未使用分をそのまま計上する。
- ・「会報編集経費」20,000円を新たに計上する。
- ・郵送料増額を考慮して、機関誌と会報の「発送費」を増額する。

### 5. 人文・社会科学系学協会「共同声明」について

太田会長より、日本学術会議 第25期新規会員任命に関する緊急声明等について次の説明があり、承認された。  
⇒ 現在、幼児教育史学会理事会の名前で「日本学術会議 第25期新規会員任命に関する緊急声明」を公表している。10月13日の教育学関連学会の「共同声明」と11月7日の人文・社会科学系学協会の「共同声明」にも理事会名義で参加している。本総会で審議いただき、学会として声明を出してはどうかと考えている。

### 6. その他

次回大会について湯川理事からの挨拶があった。

## 大会を終えて

### 幼児教育史学会事務局 浅井 幸子

幼児教育史学会第16回大会は、山梨大学での現地開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の流行のためオンライン（Zoom）で行うことになりました。大会実行委員長の秋山麻実会員を中心に、理事会が組織した委員会が準備にあたりました。当日は小規模学会の強みを生かし自由研究発表・総会・懇親会・シンポのすべてを双方向で行いました。自由研究発表は会員のみ、シンポは一般も含めてグーグルフォームで受け付け、合計70名以上の方に参加いただきました。

午前の部会では、有川優子、聶晶晶、佐藤浩代、中塚良子の各会員による4つの発表が行われました。対象地域も時期も多様性のある発表でしたが、時間をゆったりとることができたので議論を深めることができたと思います。なお、デジタルの形で資料共有することについて実行委員会の中で懸念が出されました。そこで、発表者には共有可能な資料をあらかじめドライブにアップロードしてもらい、より詳しい資料がある場合は当日に画面で共有してもらおうかとちをとりました。

午後には、総会と懇親会をまず行いました。オンラインでも会員の親睦を少しでも深められればと、梶瑞希子会員の司会のもと、順番に自己紹介を行うというかたちで懇親ができました。オンラインでは個別の会話ができないデメリットはありますが、夜の会には参加しづらい方々にも参加頂けた点はよかったです。

シンポジウムでは、オンライン開催のメリットを生かし、イギリスのレッジ・エミリア・アプローチのフレアレンス組織であるサイトライン・イニシアティブを主催するロビン・ダケット氏に、氏と親交のある秋山麻実会員がロングインタビュー（通訳：サイモン氏）を行うこととしました。現在、国内外の保育関係者が、子どもを創造的で探究的な主体として、また社会的に相互にコミットするなかで育つ存在としてとらえる保育を発展・開発するために、共に学び合う組織を作っています。同イニシアティブの経験を聴くことで、私たちがローカルな文脈でグローバルにつながりながら、いかに学び合い支え合うことが可能を考えようと企画されました。

ダケット氏は、レッジ・エミリア市の幼児教育に刺激を受けながら今までとは違った新しい可能性とやり方を探究してきた経験を語られました。1990年頃のイギリスでは、政府のコントロールが次第に強まる中で、スキルと知識の取得を重視する幼児教育が行われていました。それに対してダケット氏らは、そうでないやり方を求めましたが、言語化や実現に困難を感じていたといいます。その時に出会ったのがレッジ・エミリアの幼児教育でした。その後、同イニシアティブは、レッジとの関係を継続しつつ、教師たちの変化をサポートしています。その際に、レッジの影響を「買う」、つまり何かを学んでお土産にするのではなく、自分たちが何者なの

か、何をしようとしているのかを考える中にそれを位置付けていることを大切にしてきたと強調されました。またダケット氏は、「システミックであること」の重要性も語り、チームで動き、何をしているかを確認、学びの共同体を築きながらペダゴジーを構築していくことが重要だともおっしゃっていました。氏の話は、日本の保育者のネットワーク構築にも重要な示唆を与えてくれるものであったと思います。

本大会開催にあたり、山梨大学の高橋英児先生、塚越奈美先生にお世話になりました。深く感謝いたします。

## 大会発表記・参加記

### 初めての大会発表

#### 聶晶晶（早稲田大学・院）

私は昨年の大会時に入会、諸先輩方の研究への真摯な姿に感動し、今大会で初めて発表しました。オンライン発表は初めての経験で少し不安でしたが、事務局の先生方に支援いただき、乗り切ることができました。

私は、20世紀初頭の中国の幼稚園の成立過程について、欧米や日本からの影響を踏まえながら究明する研究を構想しています。その研究の一環として、今回は、中国側の養成機関よりも早く設立されていたキリスト教幼稚園教員養成機関の実態を検討し、求められていた教師像について報告しました。

オンラインでの質疑応答は、緊張しましたが、畠山先生、一見先生、湯川先生、太田先生から有意義なご指摘とアドバイスをいただきました。中国のキリスト教幼稚園教員養成機関の入学資格や時代背景を明らかにすることは、中国の保育者養成の歴史を紐解くことへの寄与が期待できます。先生方からのアドバイスや皆様からの励ましをもとに、その解明を今後も課題にします。

最後に、私から見て感じるのは、日本のキリスト教系学校史の研究は、中国のそれよりも進んでいるということです。日本の現在のキリスト教系学校には、史資料がたくさん残っています。しかし、中国では、新中国の成立に伴い、当時のキリスト教系学校は閉鎖されたり公立学校に合併されたりで、かなりの史料が失われてしまいました。教育史は資料がないとなかなか難しい学問です。日本の幼児教育史研究のように、中国の幼児教育史の全貌を明らかにすることはできないかもしれませんが、これからもこのような困難にめげることなく、太田先生からもご指摘頂いたように、中国の個別の学校の実態を明らかにすることで、尽力していきたいと思います。

### 第16回大会発表記

#### 中塚 良子（東北沢ききょう保育園）

昨年度は在学中にスタッフとして大会参加したのですが、そこで見た光景は、一生忘れないぐらいの衝撃でした。今まで文献でしか触れることのなかった研究者の方々のお話をナマで聞けるなんて、私はアイドルに会えたかのような気

分でした。そんな夢のような空間で今年度は、会員として発表することができました。しかもその中には、山梨大学時代の恩師や、先日までご指導いただいていた白梅学園大学院の先生方、保育問題研究会でお世話になっている方まで…。緊張、の一言に尽きます。残念だったのは、母校山梨大学で研究発表の第一歩を踏み出せなかったことです。

少しだけ、私の経歴と研究への思いを紹介させていただきます。

大学を卒業してから10年ほど保育現場で子どもたちと過ごしてきました。何度も繰り返し出現する問題、どうしてこうも保育者の置かれた状況は改善しないのか！と嘆くことを発端に、修士課程で幼児教育史の研究を開始しました。幸いにも白梅には本学会会員の先生がいらしたので、歴史研究の魅力と可能性に触れることができました。

発表で扱った保育問題研究会乳児部会は、実践者と研究者など多職種の共同研究が大きな特徴で、それが評価される点でもあります。ただご指摘頂いたように、各時代の「限界」もあったと思います。研究としてはまだ空白ばかりの状態ですが、時代の「限界」を見出すと同時に、今後の世界で「限界」をいかに超えられるかを考えようと思いました。

今回私は、保育実践者が研究をすることがスタンダードな世界になってほしいという願いを込め、所属に保育園の名前を入れました。「研究は偉い先生がするから関係ない」「偉い先生が来るから教えてもらう」ではなく、自ら学びを求めに行く保育実践者がフツウであるような、また保問研だけでなくさまざまな学会で、実践者と研究者が研究することがフツウであるような世界が来ることを願っています。学問の自由さ奪われかねない令和の時代に、公的な縛りが日々増え、「保育実践者が研究をすること」は難しくなるかもしれませんが、それもまた、自分の一生かけてのテーマになると思っているところです。

## 歴史研究の責務を実感

内田将平（ケルン大学・院）

私は2019年3月に名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士前期課程を修了し、現在は桜花学園大学保育学部にて非常勤講師として勤務する傍ら、ドイツ中西部に位置するノルトライン・ヴェストファーレン州にあるケルン大学にて博士論文を執筆しています。専攻は教育学で論文のテーマは「Bildungの歴史学的研究」です。Bildungという語はドイツ語圏特有の概念でドイツ教育界の最も伝統的かつ中心的な概念の一つですが、ドイツの教育哲学者の間でさえ未だにそれについて一義的に把握できていません。このようにその意味内容の重厚さゆえに研究を進めていく上での大変さもありますが、概念の奥行きに魅力を感じ、その歴史性をひも解きたいと思っています。

さて今年度の大会は、COVID19の拡大で山梨大学には参集せずオンライン開催であったため、先生方と直接顔を合わせることができず残念でしたが、一方、時間・空間・金銭的な制約が小さくなり、例年以上に参加しやすい側面もありました。オンラインでも白熱した議論が繰り広げられ、活発な交流がなされたのは、大会運営を担われた先生方や

お二人の司会の先生方はもとより、慣れない環境の中で発表された方々のおかげです。発表はすべて20世紀を舞台とするものですが対象地域は、日本は勿論、諸外国に焦点を当てたものもあり、いずれの研究目的・方法・結果考察も非常に興味深いものばかりで、現在私が進めている研究の全体的な新奇性の不十分さを痛感しました。国際シンポでは、ロビン・ダケット氏へのロングインタビューを聴講するだけでなく、その後のディスカッションで他の先生方と意見交換をすることができ、視野を広げるきっかけとなりました。

本大会を通して、私は「パンデミック禍における歴史研究の責務とはどのようなものだろうか」ということを考える機会を得ました。そのような折、私はハンナ・アーレント(1906-1975)の言葉：「取り返しのつかない事柄が起こってはじめて、私たちはその歴史的背景を辿るのを試みることができる。(中略)それ自身の過去を照らすほどの大きな出来事が生じるときにはいつも歴史が生まれる」(『アーレント政治思想集成2(原典:Essays in Understanding 1930-1954)』)を思い出しました。私たちは今まさに彼女の言う「大きな出来事」の只中におり未曾有の危機に苛まれています。幼児教育についてこの一年を振り返ってみると、オンライン保育やデジタルメディアの活用促進など新たな学びの可能性が示される一方で、教育格差や子どもの貧困問題など従来からの課題がより一層顕在化しました。このような状況だからこそ、私たちは改めて幼児教育を取り巻く歴史を参照し、その史実を詳細に明らかにするとともに、彼女の別著『過去と未来の間(原典:Between Past and Future)』においても指摘されているように、過去と未来の間の裂け目に生きる心構えをもった思考を続けていく責任があるのではないかと思います。

## 新入会員としてのごあいさつ

藤谷未央(お茶の水女子大学・院)

今年度入会の藤谷未央(ふじたにみお)と申します。大学院博士後期課程に在籍しております。学部時代、教育史は専攻ではなく教職課程の授業で少し学んだ程度で、卒業後は保育現場で勤務しておりました。しかし修士課程進学後、様々な方との出会いがあり、現在の事象について過去に遡って追究することの面白さと意義を感じ、幼児教育史研究を始めることになりました。

自身の研究では、1989年に改訂された幼稚園教育要領の形成過程について、1970年代以降の文部省や審議会の動向を中心に検討しています。特に、幼児が自発的に学ぶということが教育要領に定められた過程に着目しています。研究としてはかなり現在に近い時期を扱うテーマですが、先行研究のうえに新たな知見を加えたいと願っております。

学会の大会には、第14回、第15回の大会に参加しましたが、今回の大会が会員として初参加となりました。大会に初めて参加したときから、他学会ではなかなかみられない、全員が一つの会場に集まり討議するというスタイルが素晴らしいと感じていました(発表に対して、多くの先生方が様々な視点でコメントされ、議論がなされることに圧倒されるような気持ちでした。)今回もオンラインにて変わらぬ形で大会が進められ、大変嬉しく思いました。今大会で発表された方

には同世代の会員もいて、刺激を受けるとともに、討論からは研究を先行研究にどのように位置づけるのか、どのように資料を読みといていくのかなど、多くの示唆を得ることができました。また今回は初めて懇親会にも参加いたしました。緊張から自宅の椅子の上で固まっておりましたが、先生方

がつくられるあたたかい雰囲気にも救われました。

なお、今年度からは事務局幹事としても学会にかかわらせていただくことになり、いっそう気を引き締めています。今後感染状況が落ち着き、少しずつお会いできる機会が増えていくことを願っております。

\*\*\*\*\*

寄稿

「発達に目的はない」という思想の両義性

宮澤康人（大人と子供の関係史研究会）

今度の online 大会には、秋山・塩崎両会員よりご支援いただいたのに、私の IT 能力不足のため、ちゃんと参加できず申し訳ありません。しかし、ひとつ強く印象に残った発言があり、それで一文を草しました。

私が参加できたあるセッションの末尾でコメントを求められた会員のおひとりが、「発達に目的はない」という言説が交わされたことに戸惑いを感じたと、ためらいつつ発言されました。「発達に目的はない」と言われてしまうと、自分の今の実践の意味を見失い不安になる、という趣旨と私は聞き取りました。その発言はフォローされないままでした。

先の言説がどのような議論の文脈において交わされたのか知りませんが、私が理解したところでは、これはまさしく発達思想の原理上の対立に根ざした重要問題です。西洋中世後期に「内在観」と呼ばれ、近代の「新教育思想」の源流に見立てられたほど、奥の深い問題に接続するものです。近いところではデューイの現在主義を思い浮かべる人も多いでしょう。デューイは、子供の学習の過程はそれ自体がすでに目的であり、その外部に別の目的があるわけではない。ましてや、あらかじめ設定された目的があるのではなく子供が自分の現在の興味に惹かれて、当面の学習に熱中しているならば、それが将来どう役立つかをわざわざ問う必要もない。それゆえ、当面の学習を充実させることが、将来の学習の可能性の幅を広げるだけでなく、その方向性まで示してくれる、と述べています。いわば現在を生きることの自己目的性という思想で、これは明らかに、伝統思想への挑戦です。

現世の個体の命の時間は限られています。その対極に、永遠という人間の認知能力を超えた絶対的時間概念を想定し、それを基盤にして作られたのが西洋の伝統的形而上学であり、倫理学です。その解体を課題とした点では、ニーチェの生の哲学とも共通します。それは、実存主義が唱える通りでしょう。話を戻すと、デューイの教育思想は、20世紀初頭ではもちろん、今なお教育を支配するヘルバルト学派的教育原理に対抗する思想です。ヘルバルトは、教育には確固とした目的が存在することを大前提にして、その目的を実現するために教育の内容と方法があると考えました。

「発達に目的はない」という言説の思想史的背景が、大会当日議論になったかどうかは知りませんが、ここに二つの問

題点が現れていることは確かです。(1) 一つは、「発達に目的はない」という言説自体に誤解はなかったか、という比較的単純な問題です。(2) もう一つは、その先に現れる本当に厄介な問題です。「目的なしの発達支援、もしくは教育行為は本当に成り立ちうるのか」という問題です。

まず(1)ですが、かつて1990年代に、ソヴィエト社会主義国家の崩壊とともに、「大きな物語」は歴史認識に不要どころか有害である、と声高に唱えられましたが、そこには誤解がありました。そのとき、槍玉に挙げられた大きな物語とは、歴史の全過程を貫く唯一の必然的法則があるという考え方です。具体的には、ソヴィエトマルクス主義が公認する弁証法的唯物史観のことで、少なくとも、「唯一絶対の」と「普遍的必然的法則に貫かれた」という二つの限定を付けて理解しなくてはならない「大きな物語」だったのです。批判されるべきは、歴史の進行と記述に一つの固定した観点しか認めない硬直した歴史観だったのです。ここに見られるように、大きな物語一般、まして歴史叙述に必須の物語性そのものが否定されたというのは誤解です。

この問題になぞらえれば、「発達に目的はない」という言説も、「必然的な法則に基づく唯一絶対の普遍的目的はない」という限定を付けて理解すべきです。そうすれば、これは、教育の目的を狭く硬直させる考え方にはなりません。発達のいわゆる基本原理は、普通こう要約されます。1) 一定の方向・順序がある、2) 一定の段階を経て進む、3) 分化と統合の過程である、4) 個体と環境との相互作用のなかで実現する、5) 個人差がある(『新版教育小事典』(学陽書房))。

個人差が認められているだけではなく、発達の「方向・順序」および「段階」も、「唯一の固定した」と窮屈に限定されていません。即ち発達についてごく正当なことが言われているにすぎません。

ところが、一部の硬直した発達思想は、物理学をモデルとする科学主義的心理学に憧れて、厳密な法則に規定された普遍的発達概念を願望しました。今でも標準的発達にこだわる思想がないとは言えません。それに脅かされて、わが子の発達の方向や順序が科学的にみて正常か異常か不安を抱く親も少なくないようです。

そこから解放されるためにと称して、反科学主義や反発達論さえ唱えられました。その議論には、信じられない主張

もありました。例えば、物理学の厳密性と普遍性を欠く化学は果たして科学かと疑われたばかりか、生物学に至っては、例外的事実が多いだけでなく、宇宙全体の中の限られた範囲にすぎない地球でしか検証できなかつたので、科学とは言えないと決めつけられたことさえありました。

このやり取りの根底には、科学の本質と生命論、そして個体の生死をどう意味づけるかといった人間にとって切実、かつ厄介な問題が潜んでいます。今回はその一端を示唆するに止めざるを得ないでしょう。

「発達に目的はない」という言い方には、未来が途方もない可能性へと開かれているかのような幻想を抱かせる魔力めいた解放感があります。かつての「全面的発達」とか、「発達に終わりはない」の言説とは別の系譜に属するとはいえ、18世紀啓蒙時代のコンドルセに遡る、人間の精神と生活は果てしなく向上する、というロマン主義的進歩信仰の一種です。近代最悪の思想の一つと言えるかもしれません。但し、その幻想性を批判するだけならそれほど難しいことはありません。しかし、その先に、本当の難問の壁が立ち現れることを覚悟しなくてはならないでしょう。

いきなりですが、「遊びをせんとや生まれけむ、戯(たはぶれ)せんとや生れけん。遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそ動(ゆる)がるれ」という、平安時代末期の歌謡(『梁塵秘抄』359)を知る人は多いでしょう。無邪気に遊ぶ子供たちの声を耳にした遊女が目的のない遊びに明け暮れるわが身を悲しんだ、という意味にふつうは解されますが、遊女は子供のように無心に遊びに献身できない自分の不徹底さを嘆いている、と正反対にも解釈されます。どちらに現代の私たちは共感するのか、意見もわかれるところでしょう。

さらに、「シシュフォスの神話」を考えてみます。神に反逆したシシュフォスに課せられたのは、丘の頂上に重い岩を押し上げる刑です。岩は頂上にやっと運び上げた途端に落下するのでくり返し押し上げる作業を永遠に繰り返さなくてはなりません。これを遊びと呼ぶことはできるでしょうか。人間にとって同じ行為を際限なく繰り返すのはただでさえ辛いことです。それが無意味な行為と分かれば、それこそ想像を絶した耐えがたさに違いありません。

これと対照的なのは、労働の目的意識性に人間そのものの成立条件を見出したエンゲルスのような考え方です。昆虫なども人間と同様に建造物を作る。しかし、それらは、ただ本能に隷属して作るにすぎない。人間だけが、目的を意識し、計画に基づいて制作する。この観点からみれば、目的のない遊びなどは、労働より二段階も劣る、虫けら並みの行為ということになります。

教育目的論が切実であるのに、これが本格的に取り上げられることが少ないのは、いったん取り上げると、議論のアリ地獄にはまり込むことが目に見えているからです。それに加えて、教育の作用は、一定の時間を経てのち現れるものですから、どうしても、現在の行為、文字通りの瞬間作用だけでは成否を決められません。一定の時間の流れとその方向に意味を与える物語、即ち歴史哲学を必要とします。それがたとえいくら小さい物語にしても、です。ところが、実践者が普段、教育目的論に無縁であるかのように、日々の仕事に勤しむことができるのは、何かを育てる行為におのずと備わる喜びがあるからでしょう。

それにしても、目的を忘れてなお、目的に背かず、しかも喜ばしく実践し続けられる人は、自然の摂理によって生命を育てる天職を授けられた者と言うことができます。きっと、生命そのものの自己目的性と一体化しやすい資質に恵まれているに違いありません。そこには、育つものと育てる者同士の共鳴関係も働くことになるでしょう。それは時に、目的を問うことを忘れさせる麻薬効果となることもあります。

ただ、そういうことがあるにしても、今述べている様々な事態のどれにも、生き物が育つ自然作用が働いていないとは考えられません。そうだとしたら、どの局面においても、その基盤には、自然に根拠をもつ教育目的論と、それを支える歴史哲学、あるいは新たな子供の自然を発見する可能性が秘められている、と言えないでしょうか。そのことに気づく sense of wonder を私たちがまだ失っていないことを願うのみです。

**むすびに代えて:**私が学生だった頃、自然科学の中で、生物学は全くつまらない科目でした。若者の知的好奇心を刺激する要素がないどころか、生命の世界への関心を遠ざけるものでした。それとは逆に、現代の生物学は魅力ある謎に満ちています。高校の教科書をパラパラめくるだけでもその雰囲気を感じるほどです。

こういう時代に、教育学者などが、19世紀のスペンサーやハックスリーなどを題材にして、教育思想の自然主義を批判するなどは、時代錯誤というほかありません。

教育目的論の不毛の一因は、教育学における自然哲学の貧困にあります。自然に根拠をもつ教育目的の構築のためには、改めて、自然とは何であるか、とりわけ人間において自然とは何であるか、逆に自然にとって人間とは何かを突き詰めて考えなくてはなりません。要するに、保育者も教育学者も、これからもう一度、初歩から生命自然とは何であるのかを学び直さなくてはならない、ということなのです。

## 新入会員 (2020.7.1~2021.3.31)

省略



寄贈図書 (2020.7~2021.2) 大沢 裕『ペスタロッチーにおける生活陶冶思想の研究:幼児教育の視点から』

一藝社、2020年8月

### 機関誌編集委員会からのお知らせ

『幼児教育史研究』第16号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2021年5月1日から5月31日までに下記事務局までお送りください。詳細については学会ホームページ掲載の投稿要領をご確認ください。多くの皆さまからのご投稿をお待ちしております。

### 事務局からのお知らせ(↓下記に移転しております↓)

#### 1) 会費納入のお願い

振込用紙を第16回大会年度(2020年10月1日~2021年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方にお送りしております。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。(振り込み用紙が入っていない会員は完納状態にあります。) 年会費: 一般会員 7,000円 特例会員(学生・退職者等) 4,000円

送金先: 郵便振替 00190-9-73668 加入者名: 幼児教育史学会

#### 2) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、どうぞもれなくメールにて下記の学会事務局までお知らせください。

\*\*\*\*\*

幼児教育史学会会報 第31号 2021年3月31日

発行者 幼児教育史学会

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科 浅井幸子研究室気付  
幼児教育史学会事務局 E-mail: admin@youjikyokushi.org 郵便振替 00190-9-73668

編集 塩崎 美穂 印刷 木元省美堂